

ラザロ・フィエンの物語

グエン・チョン・クアン

訳 野平宗弘

一

バーリア（一九世紀末当時フランス植民地時代の南部の省、現在はバーリア・ブントウ省、ホーチミン市の南東に位置する）（現在のバーリア市）

にある砂地の聖地を通り過ぎる者があれば、どうかその聖地に立ち寄り、殉教者たちの教会わきの、半分は黒く半分は白く塗られた板作りの十字架が立っている墓を見つけ、忘れ去られぬよう、その墓を訪れていただきたい。ここ二年、訪れる者は誰もおらず、思いを馳せる者もないのだから。

その墓は、一〇年間、自らの良心にさいなまれ、今ようやく、かの地に静かに眠る、ある修道士の墓である。

私は、その僧と出会ったこと、そして、どうしてその僧が私に自分のことを明かしたかを、これから話させていた
だこう。

国家教会の時計が夜八時の鐘を鳴らしたところだ。私の荷物は船に降ろされ、すでにバーリアに向かっている。

ジャン・ド・ユイ号は、一〇時に出発の予定だから、あと二時間、何をしよう。岸に上がって、サイゴンの街をちよつとぶらついてみたいが、疲れるだろうから、行かなかった。そこでデッキに上がって、のんびりしながら月を眺めるのに手頃な椅子があるかどうか探してみることにした。というのも、その日はちょうど一八八四年一月二日、安南の二月一日（旧暦で一年最後の満月の日。家庭では祭壇にお供え物を捧げる）だったからだ。

デッキに出ると涼しい風の中に浮かぶ澄んだ月が見え、私は船べりに立って涼を取った。

そこにいと、八日以上、妻子のいる家から離れなければならず、少しばかり寂しくなった。だから、岸辺の街

灯が昼のように明るく、行き交う人や馬車で賑わい、店並みには人々が群がっている、私はそれらを気にすることとせず、ただトゥーティエム（現在の半ナミン市二区に属する一区のサイイゴ川対岸）側の川のほうを見るだけだった。そちらは、贅沢で陽気な輝きはなく、俗世の享楽の様子を示すことがなかったからだ。そこは、貧困地区で、昼間働き、夜は休んでいる。だから、二三箇所灯りがちらつくのみ、寝ていない数軒があるだけだった。

下を見れば、水面には月が映え、あたかも金紗を放つ黄金の絹のようだった。

この情景を見ると、更に寂しくなってきた、私は別のところで気晴らしをしたくなった。だが、振り返った時、私はすぐそばで大変悲しげな表情で水面を見つめている修道士を見とめた。

船には見知らぬ人ばかりだったので、知り合いになろうと、その僧に私は声をかけてみた。「バーリアで降りますか、それともブンタウ（現在のバーリ市の南二八哩、海に突き出た半島に位置し、リゾート地として有名）まで？」彼は、私を一瞬見つめて、それから言った。「私がどこに行くか聞いてどうするのですか？」

その悲しみに沈んだ話し声を耳にした時、私は真相が

知りたく、彼をまじまじと見つめた。たまたま、その時、月は明るく、そのため、私は、僧をはつきりと見ることができた。僧は、およそ三八、九歳で、背は低かった。声は痛ましいものだった！ 顔は青白く、体は痩せこけ、二つの身ごろがひらめく服のせいで、田畑に置かれて鳥を追いかうカカシそっくりだった。

私はようやく答えた。「いや、私はバーリアの地区司祭をよく知っているもので、もしバーリアに寄られるのでしたら、近いうちにあなたにお会いすることになると思ったもので。」

彼は答えた。「私はバーリアには行きません。ブンタウに静養に行くのです。もう二年も病にかかっています。でも、行ったところでたぶん無駄でしょう。もう半月も生きられないことは分かっています。」

私はその言葉を聞いて言った。「そんなことを言うてはいけません。人を限りなく慈しむ主は、いつも奇跡を起こしてくださいます。だから、そんな気落ちしないでください。すぐに元気になりますよ。」

彼は首を横に振り言った。「いいえ、あなたが私の罪を知ったなら、あなたは私を生かしておきたくはないでしょ

う……」

言葉が終わらないうちに、僧は手で顔を覆い、泣き続けた。

そこで私は彼にこう言った。「あなたの罪がどれほど重くても、主は、あなたをもうお許しくださってます。あなたはもう十分苦しんだ。死のうなんて思わないでください。あなたはまだ主の教えを知らない人々に教えなければならぬ方なんですから。だから、どうか生きて人々を導いてください。」

彼は私がそう言うのを聞いて、ようやく頭を上げ、涙をぬぐって、私を見つめ、ゆっくりたずねた。「あなたには伴侶がおられますか。」

私は答えた。「結婚して六ヶ月になります。」

すると彼は、私を手で押しながら大声で言った。「なら、私から離れてください。さもなければ酷いことが起こりますよ。あなたに危害を加えたところで私に過ちはありません。私にも伴侶がおりました。でも私の運命は不幸だ！なんとも不幸なんだ！」

言い終わると、僧は顔をおおってもう一度泣いた。しかし私は心折れることなく、彼の手を握って言った。「私に

はあなたが悲しんでいるのが分かります。きつと大変辛いことがあったか、なにか重い罪を犯したのでしょうか。私はそのことを知りたいとは思いません。でも、どうか、自分をそんなに責めないでください。もし、あなたに罪があるのなら、生きてその罪をつぐなわなければなりません。もし罪がないのに何かを思い煩っているというのだとしても、どうか最後まで生きて、運命をまっとうすべきです。」

「止めてください！ 私を慰めてどうするんです。私の罪はとても重いのです。そして自分が耐えてきた苦しみに、私はもうほとんど耐えきれそうにありません。」

この一〇年、私はほとんど心臓がないようなものだったのです。私の心臓は、灰になったも同然でした。私はほとんど理性を失ったようなものなのです。昔なら、やめてください、なんて言いませんでした。言えは言うほど、胸が痛くなります。今や死だけが私にあの人を忘れさせてくれるのです……出家して読経や祈りを上げていれば、私が全身全霊で愛した人を忘れられるだろうとも思っておりました。でも、そんなことは無駄でした。一〇年間私が耐えてきたことで、私の罪を償うには十分でした。今、私は安らかに死ぬつもりです。」

私はその苦しみを聞き、じつと黙って彼が泣くままにした。その時、自分の中でこんな考えが浮かんた。「この世に、一〇年苦しんでも収まらないほど人を苦しめる辛いことがあるなんて！」その時、私は幸せで充実していた。新婚で、愛し合っていたから、人がそんなにも苦しむのを理解できなかった。彼は病気で苦しんでいるため、取り乱しているいろいろ言っているのではないか、と思った。はつきりさせるため、彼が狂人のような顔つきをしているかどうか私はじつと見た。

私がちやうど一瞬見た時、彼は天を仰いで嘆いた。「主よ、限りなき御心よ、主よ、早く私を友に会わせてください。友の罪がどれほどであろうと、私は忘れます。主の審判の言葉があるではないですか。「私はお前たちの罪を赦す、お前がお前に過ちを犯した者を赦すように」。

私はそれを見て言った。「狂っている、この人は狂っている！」。彼はそれを聞いて私に言った、「いいえ！ あなたはまだお若いから、人生をまだ十分分かっていないのです。あるいは今幸せで、苦しみを味わったことがないから、私が狂っていると言うのです。私は狂ってなどいません！ 私の頭はしっかりしています。主よ、どうかこの方が、私が

耐えていることを気にしないようにしてください。主よ、この方の頭から、私に起こった酷いことを消し去ってください。」

言葉がちやうど途切れた時、一〇時の鐘が鳴ったので、船は蒸気を吐き出し動き出した。私はその修道士のことを忘れ、船の中に入ろうとする人たちを見ていた。

二

船が出発し、見れば、修道士はすでに自分の部屋に戻っていた。一人残った私は操縦席の後ろに立ち、船が過ぎゆく軌跡を見ながら、彼が語ったことを考えていた。考えてみると、心の中で、彼の話を知りたいという思いが湧いてきた。そこで、話を語ってくれるようお願いしてみようかとも思ったが、嫌がるかもしれない。そこで、どうすれば彼が自分のことを明かしてくれるか考えた。だが、一通り考えてみて、こう思った。人の話を知ってどうするとうのだ、と。そこで、私はまた下を見下ろして、操縦席の後で、沸き立つ銀のように浮かぶ水泡を見ていた。時々月明かりが差し込んでくると、その泡は、金銀が混ざっているかのようなだった。だが、いかにしても私の頭にはすぐ

に僧の話が浮かんできてしまうので、意を決して彼に話を語ってもらおうようお願いをしに降りて行つた。

けれども、心のままにしようとしても、まだぐずぐずしていて、降りて行つて尋ねようとはしなかった。というのもこう予想したからである。彼は私にこう言つた。「主よ、どうかこの方の頭から、私に訪れた凶事をなくしてください」。ならば、その凶事とははなはだ忘まわしいものだ。だから、おそらく修道士は何も言わないのではないかと、船がソムチエウ（現在のホーチミン市四区にある地区）を過ぎるまで私はそんな風にくずくずしていた。カートレー駐屯地（現在のホーチミン市二区の南）まで来た頃、私はようやく下に降りて自分の部屋に戻つた。

運の良い巡り合わせだった。その日は、同行の女性もいなかった。私と修道士は、ベッドが二つある部屋の相部屋だった。

降りている時、私は、夜中だから彼は疲れてもう寝てしまつているだろうと思ひ、部屋に近付いたら、彼が驚いて起きないよう、こつそり静かにカーテンを開けようとした。しかし、部屋に入ると、彼はベッドに跪き、頭を垂れて、経を読み、また先ほどデッキで聞いた言葉をつぶやいていた。

それを見て、彼が経を読むのを邪魔しないよう、引き下がろうとしたが、一歩下がろうとした時、彼は私を呼び止め、こう言つた。「氣にすることはないです。どうぞベッドに上がつて寝て下さい。読経が終わつたらちよつと休んで、それから、あなたに私の話をお聞かせしましょう。」

それを聞いて、私の心は躍り、私はベッドに上がつて横になつた。彼もまた自分のベッドに上がつた。しばらくして、大変疲れているかのようなため息を耳にして、私は頭をもたげ、下をのぞいて聞いてみた。「お疲れではないですか。お体は大丈夫ですか。」

彼は答えた。「何でもありません。ご心配なさらないでください。体もいつも通りです。」

そこで私はまた横たわり、彼が自分のことを話すのを待とうと意識を保つていたが、疲れに負けてしだいに眠りに落ちていつてしまつた。夜半近く、船内の皆が寝静まり、リズムよく鳴る船の動機の音を除いてどこも静かになつた頃、私は呼びかけられた。「どうぞでしょう。降りて、私の近くに来ませんか。私の話をお聞かせしましょう。」

呼びかけられて、私はおどろき、震え上がつた。墓からその声が呼びかけているかのようなのだ。それにそ

の時は、部屋の窓が空いていて、夜風が吹き込み、肌寒く、それで一層震えてしまったのだった。

私が毛布にくるまり直して、返事をせずにいると、また呼びかけてきた。

その時には目も覚めていて、下に修道士がいたことを思い出し、そこで私は下に降りて、椅子を彼のベッドわきに持つてきて、腰掛けた。

私が傍らに座ると、彼は私の手を握って、こう言った。

「ああ、私はまったくの不幸者です。主よ、どうか私の罪をお許しください……私は罪人です。」

話すにつれ、彼は涙をますます流した。私は彼の話をなんとかしても知リたかったが、彼が語るに耐えなければならぬ辛い事を思つて、こう言つた。「もし苦しいのであれば、どうか話すのをやめてください。」

彼は答えた。「いえ！ いえ！ 私はもう長くはありません。自分の罪を隠してはおけません。一〇年間、私は誰にも知られず隠し通してきました。皆をあざむき、私が修行している学校の神父様たちをあざむき、私のことを善良な人物だと思わせてきましたが、でも実際には、私はどれほど罪深き者でしょう。どうか耳をすまして私

の話を聞いてください。話している時に疲れてしまったら、長い間、あなたを待たせてしまうでしょうから。」

そう言うのと、話の前後すべてを思い出し最後まで語ろうとするように、彼は目を閉じた。

三

しばらくして、彼は目を開け、言つた。「どうか耳を近づけて聞いてください。」

「私はバーリアの者で、故郷はダットドー（当時のバーリア省の地区）です。私の父は、信心深いキリスト教徒で、もとはクワンビン

（ベトナム中部の省）の者ですが、だいぶ昔にダットドーに來ました。母

はザーディン（当時のサイゴンを中心とした省）の者です。私が生まれたのは、ちよ

うど嗣徳帝（阮朝第四代皇帝、在位は一八四八―一八八三年）が即位した一八四七年です。

私は、五人目の子供でしたが、生まれたときには私一人でした。兄弟は幼い頃に死んでしまったのです。

当時、キリスト教は、大変な困難に耐えておりました。というのも、キリスト教徒を捕らえるという王の勅命があつたため、外道の者たちが機をうかがい、私たちに危害を加えていたのです。

そのため、三歳になった時から、私はすでに困難に耐

えてきたのです。その頃、母は、四〇歳でしたが、コレラにかかり、私と父を置いて一八五〇年に亡くなりました。当時、父は四六歳を越えたところでしたが、親戚は誰もおらず、そのため、父がどこかに出かける時には、私もついて行きました。父が祭礼をとり行う家があつて行けば、私も一緒に行つたのです。キリスト教徒が助け合っているのを外道に気付かれると、役人に言われ、捕まえられてしまいます。だから、誰もが彼らに捕まらないよう、どうか身を潜めておりました。そのため、父が私を森に置いて逃げ、三日後になつてやつと戻ってくる、ということが何度もありました。その三日間は、木の実と木の根を食べて飢えをしのがなければなりませんでした。

生まれてから二〇歳になるまで、私はキリスト教徒の逮捕を目撃してきました。私の父は地区の代表者だったので、一層おびえておりました。日曜日に礼拝を見に行こうとするなら、多くの甘さと苦さを味わわなければなりませんでした。ダットドーの神父も逃げなければなりませんでした。ある時にはこちらの家で礼拝を行い、ある時にはまた別の家で行うのです。外道に気付かれた時には、いくつもの村の向こうまで行かなければなりませんでした。だ

からキリスト教徒は、数え切れないほどの苦勞をして、ようやく自分の地区の神父を見つけなければならなかったのです。」

ここにきて、彼は少し口をつぐんで休み、話の続きができるよう思い出してから話そうとした。

あたかも頭の中の自分の物語を読むかのように、その本の中身を読んでから語ろうとしているかのように、彼が額に手を当て目をつぶっているのを、私は黙って見ていた。

四

そして私は考えた。この人は三歳の時から、辛さがどのようなものだったのかを知っていた。飢えや渇きに耐え、疲勞や汚辱に耐え、虎や象、猛獸のいる場所に逃げ、危険や貧困を経験し、幸せを忘れてしまった。だから、心は今や鉄より固くなつてしまい、もう辛さも浸透しなくなつてしまつて、「私が耐えてきた苦しみは想像を超えていました」と嘆いたのだとしたら、その苦しみとはどれほどたちが悪いことなのだろうか。そして、その苦しみは何のせいなのか。修道士はこう言っていた。「私にもあなたのように伴侶がおりました。」なのに、どうして彼は修道士

なのか。それに彼はこうも言っていた。「主よ、どうか我が友と合わせてください。」あるいは、彼が憂いているのは、自分がとても愛していた友を失ったからで、だからあれほど憂いているのではないか。ありえない話ではない。いや、もしそれだけで憂いているのなら、「彼の罪がどんなものでも、私はもう忘れた」などとは言わないだろう。

だから彼はきつと、狂っているのか、あるいは想像できないくらいあまりに奇怪なことをやったのだろう。

私がこんなふうに考えていると、彼が二度ほど軽く咳をして、こう言うのが聞こえた。

「あなたは私の話を聞いて、私のことをどう思ったでしょうか。母の腹から生まれ出た時からもう苦しみに耐えながら成長しました。大きくなれば少しは幸せになれるかと思っていました、叶いませんでした。私は、生涯、苦しむ運命だったのです。

でも私が一二歳まで耐えてきた苦しみは、思えば、フランスがやって来てから耐えてきた苦しみほどではありません。それは一八六〇年、私が二三歳の時で、こんなふうに人が騒いでいるのを聞きました。「ザーディン省はもうフランスに取り入れて数カ月になる。もう数日すれば、ビエン

ホア（現在のドンサオ省。バーリアの北に位置する。）とバーリアも討ち取るだろう。」と。外道はそれを聞いて恐れ、キリスト教徒は喜びました。人々は、「フランスがやって来たらキリスト教徒を庇護し、そうではない者たちを殺すだろう」と思ったのです。

でもキリスト教徒が喜んだのは、ただ、もう少しすれば邪魔されずに自分の信仰を守れると信じていたからです。

キリスト教徒に対して安南の役人が行う酷いことを知っていたら、フランスがこれからバーリアを討ち取るとしても、彼らはそんな風に期待などしなかったでしょう。

まったく、そうだったのです。次の年、フランスがバーリアを取ったと聞いたのですが、キリスト教徒はいえ、安南の役人に燃やされてしまったのです。その時は、誰もが恐れおののきました。ある者はフランスがやって来て殺されるのを恐れ、ある者はフランスがやって来る前に、安南の役人に燃やされるのを恐れました。でも、逃れることはできませんでした。というのも、数カ月後（その時私は一五歳になっていました）、キリスト教徒を捕まえてすべて投獄し、その後脱走した際にも捕まえやすいよう、両耳のふちに「ビエンホア邪道」と刻んでおくよう、御触れ

があつたのです。私と父も捕まって同じ所に投獄されてしまいました。

ああ、投獄された者の苦しみをあなたにお話して聞かせたいですが、叶いません。最初の頃は、牢屋の中にいる者もお金があつて、見張りの兵士にあげれば、邪魔されずに自分のことができました。でも、兵士に渡すお金が尽きてしまうと、数知れないほどの苦しみに耐えなければなりませんでした。皆、足かせを付けられていたので、痛みで病気になる者もいれば、外に出たくても兵士が行かせず、自分の居場所で不潔なことを様々やらなければならず、牢屋は恐ろしいくらいに悪臭を放つようになり、たくさんの人が病気になるて死んでしまいました。私達もそんなふうに四ヶ月の間耐えなければなりませんでした。一八六二年になつて、フランスの兵士たちがやってきてバーリアを取つたという噂を聞きました。でも、悲喜いずれも長くは続きませんでした。というのも、フランス兵がやって来る前に、牢屋は燃やされ灰になってしまったからです。バーリアを取つた時には、牢屋に残つたのは骨の山だけでした。」

ここで私は彼の話を止めて尋ねた。「でもどうやって牢

屋から抜け出たのか、おっしゃっていませんか。」

彼は頷いて答えた。「私の父は、牢屋が燃やされる前に、寄生虫の病にかかつておりました。燃やされた時、父は人々が叫ぶのを聞いて、起き上がったものの、牢屋が燃えているのを見て、びつくりして、ひっくり返つて死んでしまったのです。そんなふうに父が死ぬのを見て、私はもう生きたとは思えませんでした。走り寄つて父の亡骸を抱き、炎に包まれ父と一緒に焼け死ぬ決意をしたのです。でも、炎が迫つて私の二本の足を焼いた時、その痛みのせいで、私は何もかも忘れ、牢屋から飛び出したのです。

牢屋には全部で三〇〇人いましたが、残つたのはたったの一〇人でした。」

ここまで話すと、彼は額を叩いて、こう言った。「そうです。私は当時のことを昨日起こつたことのようにはっきり覚えています。それは私の頭にはつきりと残っているのです。」そう言うと、彼は長いため息をつき、自らの手に顔をうずめた。

五

船の時計が深夜二時を告げた時、彼はこう話を続けた。

「私は牢屋から出ましたが、どこに行くあてもありませんでした。あたりを見渡すと、見知らぬ人たちがいました、キリスト教徒をかくまったら役人に捕まるのではないかと恐れて、私を家に連れて行つてはくれませんでした。

父もなく母もなく親戚もなく、ひとりぼっちで道ばたにいて、憐れんでくれる者も誰もいないと分かった時、私は、山に登つて、猛獣たちにこの身を与えてしまおうと決めたのでした。そうして、まっすぐ数里歩いて行つたのですが、やけどを負つた私の足は腫れて、あまりに痛くなり、もう進むこともできず、道ばたに座つて泣いていました。その時、日はもう沈みかけ、私は痛いのと疲れと飢えで、草むらの中に倒れ込んで、気を失つてしまいました。どれだけそこにいたのかは分かりません。というのも、目覚めて目を開けた時には、私は傷兵病院に横たわつていたからです。私は傷を負つた兵隊の横に寝ていて、足元には、腫れた私の足に薬を塗っている医師がおりました。

私は病院に四〇日以上おりました。二本の足は固定されてゐるため、身をよじることも出来ず、どこかへ行くことも叶いませんでしたが、その四〇日のうちに、ある役人が数日おきに私に会いに来たのです。私の足が良くなった

時には、彼は私を呼んで、通訳に尋ねさせました。「バーリアには、お前の両親、親戚はまだいるのか。」

私は申し上げました。「私には身寄りがありません。父は獄中で亡くなり、母は私が幼い頃に亡くなっています。」

すると彼は通訳にこう言わせました。「私は草むらで死にかけているお前に出会つたのだが、その賢そうな目を見て可哀想になり、連れて帰つてお前が良くなるまで面倒を見たのだ。お前に両親がいるなら帰らせようと思つたが、身寄りが無いというなら、俺と一緒にザーディンに連れて帰ろうと思う。行くだろうな。」

そこで私は申し上げました。「あなたは私を死から救つてくれました。あなたは私を憐れんでザーディンに連れて帰つてくれるとおっしゃりますのに、もし行かなければ私はどれほど薄情で愚かなことでしょう。」

三日後、私は船に乗つてザーディンに向い、そこで六ヶ月すごしました。それからその役人は、病氣にかかりフランスに帰らなければならず、私はレフェーブウル神父に預けられました。

一八六四年まで、私は一年半、神父のところにて手伝いをし、クオツクグー文字（ベトナム語表記のためのラテン文字に基づく文字で、現在使用されている文字）を学び、

それから神父は私をラテン学校に入れてくれました。

入学してすぐ、私は同じ時に入学したヴェロ・リエウという名の者と義兄弟の間柄になりました。彼はカウコー（現在のポーランド、ワルシャワの二地区）のキリスト教代表者の息子で、私より二歳年下だったので、兄の立場を私に譲ってくれました。二人は血のつながった兄弟のように互いを思いやりました。片時も離れることなく、教室でも、寝室でも、食堂でもいつも近くにおりました。学期が終わった時、私は学校に残りたかったのですが、リエウ君はそうさせてはくれず、私を連れて帰省したのです。

リエウ君の両親は、自分の息子と友情を結んでいる私を見て、わが子のように私を愛してくれましたから、私がラテン学校で学んだ二年間は、何も欠けるものではなく、大変幸せでした。私はリエウ君の両親を愛し、二人を自分の本当の両親のように思っていました。

一八六六年まで二年間学んだ後、神父がやって来てアドラン校を設立した時、私たち二人は、そこに行つて学ぶことにしました。そこで学んでいても、二人は昔のように固い絆に結ばれていましたし、前のように私はしよっちゅう彼の両親の家に行つておりました。

ドイツ人とフランス人が戦った一八七〇年になると、私たち二人は、サイゴンでの試験を受けに行きました。運良く、二人は共に試験に合格し、長官の官邸での仕事を命じられました。そのため、私はまだリエウ君の両親の家に身を寄せておりました。

私が通訳を務めて六ヶ月が経った頃、リエウ君の両親は私とその家について、遠慮してくつろがないでいると思い、私が独り立ちしてその家を離れられるよう、私のために伴侶の心配をしてくださいました。

ああ、もしこの義に厚い人が私の幸せを壊すことを知っていたら、私はどれだけ彼を遠ざけていたことでしょう。あなたも見ればお分かりになるでしょう、人の心がどれほど偽りのものであるかを。彼は私と固く結ばれていたというのに、私を知らずのうちに困難に陥らせようとしていたのです。

牢獄で父と一緒に死んでいたら、これまでの苦しみからも逃れていたことでしょう。三五年のうちに、私が幸福であつたのは五年にも満たないものでした。残りはずっと苦しみに辛さに耐えるだけでした。

六

私がアドラン校にまだいた頃、リエウ君の両親は、私と彼、二人に会いによくやって来ていました。そんな時、リエウ君のお母さんは一七歳くらいの女の子もよく一緒に連れてきました。その人は礼儀正しいというわけではなかったけれど、良い感じに見えました。話し方は穏やかで、顔立ちは気品もあり、人に気にいられるような立ち居振る舞いでした。その人は、リエウ君の叔母の子でした。

最初の頃、やって来た時には、私も、ただの親戚くらいに思っていました。でも何ヶ月もしないうちに、私は恋愛感情を抱き、いつもその人のことを思うようになったのです。そのように私がその人を好きになったのは、一年ほどだったでしょうか。試験に合格して学校を出る時まで続きました。

でも、どれほどその人を好きであつても、私には、固い友情で結ばれたリエウ君に打ち明けることができませんでした。

そして、ちょうど日曜日の礼拝を見に帰った日、リエウ君のお父さんが、私を庭での散歩に誘いました。石塚まで来た時、彼は私にこう言いました。「ここでちょっと休んで、

話をしないか、ラザロ君！」

彼が私に座るよう言った時、心のうちでは、何かがあったから私一人を庭に連れだしたのだろうと思ったものからです、私は腰を下ろし、黙っていました。

リエウ君のお父さんも少し黙った後、私の手を掴んでこう言いました。「昔も今も私がお前を自分の子供のよう愛していることを分かっているだろう。だから、学校が休みになって、息子が帰ってきて、君が帰ってこなかったら、大変寂しいものなんだぞ。」

君が私達老夫婦を自分の両親のように愛してくれていることも分かっている。だから、私達二人も嬉しいし、リエウが君を慕っているのが分かるとさらに嬉しくなってくる。というのも息子は、君の振る舞いを真似して、自分を直し、不良連中からは卒業したのだから。」

そんな風に話すのを私が黙ってうつむいて最後まで聞くと、リエウ君のお父さんはこう言いました。

「君ももう大きくなった。だから今日、聞こう。君が気になっている人がいるなら言ってくれないか。私が君のことを世話してあげよう。」

どうか断らないでほしい。もし断ったら、私達夫婦を

大変悲しい思いにさせることになる。私は金持ちではない。でも、君はわが子も同然だ。だから、君にそれなりの心配はできる。君が伴侶を得て、独立したい時には、私がすべての面倒を見て、独立させてあげよう。

だから、同意するかどうか正直なところを教えてはもらえないだろうか。」

私は答えました。「お義父さん、お義母さんは、身寄りのない私のために、家に連れて帰って本当の子どものように世話をしてくれました。でもまだその恩をお返しできないうちに、私の伴侶を心配してくれるとすれば、私はいつになったらその恩をお返しできるのでしょうか。」

それに、私はそれまで結婚のことなど考えてもいませんでしたので、決めあぐねておりました。そこで、お父さんは言いました。「恩を返す必要などない、ラザロよ！ 君は子で、私は父だ。君が言えば私はすぐに動こう。もしどうしたらいいか分からないのであれば、私が教えてあげよう。」

私を訪ねてよくやって来る、わが村の一八歳くらいの娘を君は知っているだろうか。」

そう聞かれて私が顔をそむけたので、お義父さんは笑っ

て言いました。「わざとらしい！ ラザロ君もきつとその娘を知っているはずだ。だからそんな風に顔をそむけるのだ。」

私がその人を好きだということがリエウ君のお父さんには分かっているのだと思い、私は意を決して正直に言いました。

「これまで私は誰にも自分の気持ちを打ち明けませんでしたが、お義父さんが私の気持ちを探ってはつきり分かっていたからには、白状いたします。私はこの一年半ほど彼女に恋心を抱いてきました。でも、私はみなしごで、彼女にふさわしいとは思っていませんでしたので、心の中にしまつて、誰にも打ち明けることはありませんでした。」お父さんはそれを聞くと大きく笑って言いました。「ははは、ラザロ君、そんなことどうってことない！ どうってことない！ 若者は、年寄りが何も知っていないと思っている。」

だが、何でもお見通しだ。私が話をすれば、向こうもすぐに承諾するより他はない。」

そして本当に、一ヶ月後、リエウ君の叔母の娘と私は祭壇の前で、結婚の許しを受けたのです。

ああ、私達二人の幸せを話せばきりがありません。私

のように妻を愛せる者はほとんどないとも思っていました。夫婦で一緒に暮らすようになって、私の思いは、以前と変わりありませんでした。

私の妻も、私に出会ってから大変幸せでした。というのも、私が愛したように彼女も私を愛していたからです。ですから、どれほど気にかかることがあっても何も口に出すことはなく、孤独なみなしごであるという私の運命を思い出させることは一度もありませんでした。その当時の私の幸せは限りないものでした。

私と妻は、リエウ君の家に六ヶ月間いました。その後、バーリアで通訳をやるようにとの役所からの手紙を受け取りました。」

ここに至って、修道士が深夜三時の鐘を聞いた時、彼は震えて叫んだ。「あれです！ あれです！ あいつがあとここにいます……！！ もう死ぬ……！！ あいつが私の手を掴んでいる……！！」

それから小声で言った。「ああ！ 私は罪人です。私は罪人なのです！」言い終えると、目を閉じて休んだ。

少し休んで、また目覚めてこう言った。「ここから私の苦しみが始まります。私がバーリアに行って二ヶ月経ち、

駐屯地の役人達と知り合いになったため、よく彼らとご飯を食べに行くようになりました。その役人達の中に、安南の妻を持つている役人がいました。

その女は私を見ると、いろいろなことをして、私にその女との過ちを犯させようと唆してきました。だから私は、自分の妻を傷つけることのないよう、避けるようになりました。次第に私は駐屯地で役人達と一緒にご飯を食べなくなり、その女の前に姿を出さなくなりました。

一八七二年になって、リエウ君は仕事を辞めて四ヶ月が経ち、バーリアに来て馬を買い、サイゴンに連れて帰るということになりました。

彼が来ると私達は大いに喜び合いました。八ヶ月の間、顔を合わせなかったのですから、再会すれば、お互い話も長くなりました。」

ここで、修道士は私の手を掴んで言った。「こちらに耳を近づけてちゃんと聞いてください。これからが私の二つの罪になります。これからが、私の苦難の始まりになります。——とても疲れてしまいました。少し休ませてください。事の次第をはっきり思い出しますから。」

七

彼は目を開けて言った。「どうか、トランクを開けて私の手紙を取り出して読んでみてください。それから続きを話して聞かせましょう。」

私がトランクを開けると、一通の手紙があった。私はその手紙を灯りの近くに持つていき読んだ。

バーリア 辛未 八月一四日

謹啓

この手紙を書いている私は、昔から今まであなたのことを思っていた者です。本当のことを言えば、あなたの心は大変痛むことでしょう。でも、目の前の嫌な気持ちに、どうして耐えることなどできません。

これまで、誰もがあなたの伴侶のことを徳があつて、おとなしく、夫に大変尽くしていると褒めていて、とても奇怪なことを誰も疑ったりしませんでした。どうして、そのような道徳的な外見の人が、浮気心を持てるのか、私には分かりません。もっと酷いことには、その人は、自分の親戚で自分の夫の大親友を選んで、罪を犯したのです。

私には分かります。あなたがこの手紙を受け取ったら、

私のことを嘘つきだと言うことでしょう。でも、信じてもらえるだけの十分な証拠が私にはあります。

あなたの伴侶の服を入れてあるタンスを見てごらん下さい。リエウ氏があなたの伴侶に送った二通の手紙があるはずです。それで私が間違ったことを言っているかお分かりになるのではなでしょうか。

いろいろと申し上げました。どうかご勘弁ください。

私が手紙を読み終わると、修道士は言った。「ああ、その日、夫婦と親友親戚が楽しく団らんしている時に、その凶事が我が家に訪れたのです。というのも、その日に、私はその手紙を受け取ったのですから。」

ああ、その手紙を受け取った時の私の心の苦しみは言い尽くせません。あなたはその苦しみを知らないほうがいいでしょう。

どれほど辛くても、私は何事もなかったかのようにしていたのですが、でも心の中では、こんな風に私の幸せを壊した二人になんとか復讐しようと私は決めていました。

人はこう言います、「凶事は単独でやってくるものではない。一つの凶事は、他の一群の凶事も連れて来る」と。

八

手紙を受け取って一週間以上経ち、リエウ君は馬を買ってサイゴンに運びました。リエウ君がジャンク船に乗って一日経った時、次のような知らせが入りました。「強盗がサイゴンに向かう途中に立ちはだかつて、商売船に攻撃をしかけてきている。」

参事官がこの知らせを聞いて、私を呼んで聞きました。「十人の兵を連れて強盗を捕まえに行ってくれるかね。」

私はしばらく考えてこう申し上げました。「敵に反撃できるよう、私に兵と弾薬を十分にいただけると、行きましょう。」

すると参事官はすぐ私に武器と兵士の優先権を与え、そして間に合うよう出発しなければならぬと、教えてくれました。

許しを得た時、私の心は、半ば嬉しく半ば悲しく、動揺し震えていました。というのも、十分許可を得た上で、心おきなくやっと終わらせられるような、奇怪なことをしようとしていたからです。

準備を整え、出発当日、私は一三人の兵士をジャンク船

に連れて行きました。幾本かの川を過ぎると、タックモイはすでに遠く離れていました。

そして、次の日の夕方六時頃、私は川の向こう側の岸辺近くに、リエウ君のジャンク船のような船が止まっているのを見たのです。何度も見て、それが彼の船だとはつきりすると、私は船を止めてご飯を食べ、兵器を準備しました。その夜、高潮になった時に強盗が出たら撃つためです。

もし、その時の私の顔を見たなら、あなたは間違いないく震え上がったでしょう。その時の私は幽鬼のようだったのですから。ほどなくして、私は無実の人を殺すというのに、その時の私は作り笑いを浮かべていて、顔付きはとも恐ろしいものになっていたのです。

船上でご飯を食べ休むと、ちょうど三更半(午前四時頃)になっていて、水位が高くなっていたので、私は船室で起き、灯りをすべて消して、強盗が気付かないで行くようにしました。

銃の準備も整った頃、ちょうどリエウ君の船が川の真ん中を進み、私の船の前を横切りました。私はすぐに、操縦席にいた見張りに、近付くよう命じました。

しかし見張りはこう言いました。「あっちの船が近付い

てくる！」そして、リエウ君の船から銃声が聞こえ、私の耳の横を弾が一発ビュンと横切る音がしました。

弾が私に命中しかけたことに私は激怒し、リエウ君に対する復讐心も一層強くなりました。私はすぐに叫びました。「恥知らずにも立ち向かってきたぞ！ 撃て！」

すぐに一〇本の銃がリエウ君の船に銃口を向け、一斉に撃ちました。ちょうどその時、声が聞こえました。「ああ！死ぬ！」それを聞いてリエウ君の声だと分かると、私の怒りと恨みは、どこかに吹き飛んでしまいました。そして恐ろしくなり、自分を責め立てました。私は權をこいで行きました。彼をなんとか救う手立てはないものかと思ひながら。

でも、到着すると、リエウ君はもう息を引き取るところでした。私は悲しくなり、自分を責め、泣き続けていましたが、私は自分の罪のために泣いたのであって、リエウ君のことはこれっぽっちも憐れには思いませんでした。

原因の調査をしてから、私は兵に命じて船を岸に付け、朝まで休んでから戻り、役人に報告しました。

戻って、私は参事官に報告しました。「おとといの三更頃、一艘の船が、停泊してあった私達の船の前を横切り、強盗

を迎えに行こうとしていました。船が横切る時、私はこちらに来るよう呼びかけたのですが、その船は近寄るところか銃を一発撃つてきました。立ち向かってくると思い、私は兵に命じて撃ち返しました。撃つた後、權をこいで近付いて見ると、それはちゃんとした通行証を持っていて、馬を買って帰るリエウ君の船だと分かりました。私が彼に尋ねると、彼はこう言いました。「あなたが呼びかけた時、私はそれが強盗だと思ったので、舳先に昇って撃つたのです。向こうから強盗が反撃してくると思いませんでした。でも私は舳先にいたので、弾に当たり、死んでいくのです」と。

私が報告すると、参事官は言いました。「君は役人の命を受けて、強盗を捕まえる許しを得ているし、撃ち返す前に、その人がはつきりと尋ねなかったのだから、死ぬのは仕方ないことだ。君に何の罪もない。」

そう言うと、参事官はどうしてちゃんと確かめなかったのかと叱り、そして、私に、帰って彼をちゃんと埋葬するように命じました。

そうして、その日から今に至るまで私の気持ちは安らぐことはありませんでした。私はすぐに銃のことを思ってしまう。特に、寝ている時、私は強盗に捕まり撃たれ

る夢をいつも見るのです。

でも、私の良心が私をどれほど断ち切ろうとしても、私に対して罪を犯した友、リエウ君の過ちを忘れることはありませんでした。

裁判所から帰ってくる時、私は何度も、妻にすべてを問ひ尋ね、そして妻を許そうと思いました。でも、家に近付くと、口を聞きたくなくなり、こう思ったのです。妻に問い尋ねたとしても、きつと認めたりなどしないだろう。誰がわざわざ自分は強盗だなどと自白するだろう。だから、妻が私に対して犯した過ちへの疑念はおさまることがなかったのです。

九

私が幼い頃、モイ族（の森族）がよく物売りに私の家にやって来ていました。そのモイ族のうちに、よく庭に出て、草の中に生えている薄紫色の花を摘んでいる子がいました。その様子を見て私もまねをして遊びました。私がその花を摘んでいるのをモイ族が見た時、摘んではいけない、それは大変な毒性のものだから、と叫んで言ってくれたのでした。ひとつまみ煎じて飲んだだけで、徐々に病気になる、

七、八ヶ月から一年したら、死んでしまう。飲んでしまつたら、治療できる薬は何もないというのです。

その時、リエウ君が死んで一五日が経っていました。その日、私は自分の辛かったことに思い馳せていて、心は乱れ動揺していて、狂つたようになっていました。私は、涼しい風にあたり少し庭に出ました。

庭を一周しないうちに、足元に紫の花の咲いた草むらがあるのに気付き、摘んでみると、それは、かつてモイ族が私に話していたあの毒の花だと分かりました。

そして、私は一時にその花めがけてうつむき、一握り摘んで、ハンカチに包み家に入りました。私がやろうとしていることは大変酷いことでしたが、家に入った時、私の頭は、あたかも幸せなことをするかのように落ち着き冴えていました。

家に入り、妻が台所で深鍋を火にかけているのを見て、私は尋ねました。「何を煎じているだい？」妻は答えました。「この三、四日間、咳がひどくて、声がでないの。飲んだら治るかどうか、白菊とライムを煎じてみているの。」

私は黙って何も言わず、うつむいて、ずっと鍋を見ていました。鍋を見ていると、それはあたかも、私がハンカチ

の中の花をそこに入れるよう招いているかのように、踊っているのです。ちょうどその時、妻はビンロウを食べに母屋に行っていたので、私は鍋蓋を開けて、一握りの花を入れたのでした。

妻はそれを飲み、翌日になると、ベッドから起き上がることもできず、何も飲み食いできなくなっていました。

ああ、自分の罪がどれほど重いものか分かった時、そして、私の妻がベッドに横たわってあえいでいるのを見た時、私は悲しくなり、後悔し、自分を責め、妻を死から救おうと思いました。私は何人もの医者を迎えましたが、先生が来る度に私はうな垂れました。なぜなら、二〇年以上前にモイ族が私に言った言葉を私は思い出すからです。「飲んでしまったら、どんな薬も治せない」と。

日毎、妻は痩せ衰えていきました。妻の病状が日増しに重くなるにつれ、私はどれほど自分を責め立てたことでしょう。

妻は一ヶ月以上苦しみました、妻が口を開いて話すことも何かを嘆くことも耳にはしませんでした。私が悲しんでいる時に、優しい言葉を探して私を慰めようとしていたことはあります。

ああ、その一ヶ月、私はどれほど自分を責め立てたとか。私が悲しみ、涙を流すのを何度も見る度に、妻は自分のために私が泣いているのだと思って、私にこう言うほどでした

「どうか落ち込まないでください。私は死んだりしません。薬も飲みましたし、もう少しで良くなりますから。」
そのような言葉は、私の心に突き刺さる刃のように私を苦しめるのでした。

私は一八七三年の半ば近くになるまでそのように苦しみました。ある日、妻が大変やつれているのを見て、この世を離れるのももう間近だと分かり、私は妻の側にいました。夜半になって、妻が息をつくだけになったのを見て、もう長くはないと思い、僧達を招いて、再生を願う者のためにお経を呼んでもらいました。

僧たちがやって来て経を読み、主に呼びかけ、少しすると、時計は午前三時の鐘を鳴らしました。その時、妻は私の手を引いて口元に近づけこう言いました。「どうして死ななければならぬか、私は分かっています。でも私は、あなたを許してくれるよう主にお願います」。そう言うとき、四時になった時、魂は肉体から離れたのです。

ああ、この世に一人残された私の悲しみは、想像以上のものです。それに、大変愛していたというのに、私の手で死ななければならなかった二人のことを思うと、私は昼も夜も悲しく恐ろしくなりました。

そのため、妻を埋葬し終えようと、私は仕事を辞めて、サイゴンに行き、しばらく私がタンディン修道会に入って修行をさせてもらえるよう神父に頼みました。

修道会に入り、私は懸命に暮らしました。昼夜、経を読み、祈りを捧げ、菜食、苦行をし、勤勉丁寧に学びましたので、私の上の者たちは満足し、私のことを褒めました。私は一生懸命修行をして、自白していない二つの罪を忘れようとしていました。そのため、外面で、人は私を仁徳者だと言いましたが、実のところ、偽装した罪人にすぎなかったのです。だから、どのようにしたとしても、私の良心は嘔みついてきて、安らげる時などなかったのです。

わたしは苦しみに耐えながら勉強して六年が経って、僧の職を得、一八八二年になって、この病気にかかったのです。体が疲弊している上に、心も安らぐことがないのでから、たくさん病状が生じているのです。

この二年、私は病院にいて薬を飲んでいましたが、病は

日増しに進行し、医者は「綺麗な空気でおそらく和らぐのでは」と、私にブンタウに行くよう言いました。

ここまで語ったところでちょうど明け方になり、船はブンタウに到着した。

私は彼にこう言った。「私に語ったあなたの罪は、極めて残酷なものです。でも、主の慈悲は限りなく、今まであなたを生かしてくれたのですから、懺悔すれば、主は間違いなくあなたをお許しになるでしょう。」

彼は答えた。「ご心配なさらないでください。明日バリア区の神父がブンタウに来たら、私は自分の罪をすっきり告白します。私が耐えてきた苦しみは自分の許容を遥かに超えるものでした。」

私はまた尋ねた。「ブンタウでは誰の家にいるのですか。」彼は答えた。「私はバリアの父がブンタウに来た時に休むために建てた家にいます。」

話し終わった頃、船は錨を下ろした。彼が私と別れの握手をして地上に降りた時、彼は私を見つめて言った。「私をしつかり見てください。おそらく私達が会うのはこれが最後のことです。どうかご無事で。今後、バリアに来ることがあれば、どうかラザロ・フィエンの墓の前でお経

を読んで下さい。」言い終わるとフィエン氏は船から地上に降り立った。

一〇

彼が降りてから半時間で船はバーリアに着いた。私はバーリアに一週間いて、それからサイゴンに戻った。一八八四年一月二七日までラザロ・フィエン氏からの知らせはなかったのだが、その日、配達員が一通の手紙を私の家を持って来た。封筒にはバーリアの消印があり、封を開けると次のように書き付けてあった。

バーリア、一八八四年一月二五日

主キリストの裡で健やかなるあなたに。あなた方ご夫婦への主のご加護を祈って。

世間には私が善良な人物だと思わせながら、私はこれまで自分の罪を隠して生きていました。だから、この世を去って灰塵の中に横たわる前に、私は人々に自分がどんな人物なのか、私の罪がどんなもののかを知らせたいと思っています。そこで、あなたに手助けしてもらおうとこの手紙を書いているのです。今、私がやったことを知っ

ているのはあなたとバーリア区の神父だけです、地区の神父は、私の罪を他人に打ち明けることを認めてくれません。そこで、あなたにお願いします。私が死んだら、私の話を語って皆に知らせてもらいたいです。それから、一八八四年一月一二日にジャン・ド・ユピユイ号の中であたに話したことの続きを、以下に語ってお聞かせいたします。おそらく、この手紙を受け取る頃には、ラザロ・フィエンはもうこの世にいないでしょうから。

魂となった父の近くにいられるよう、私がバーリアに戻って三日が経ちました。医者が、私はあと三日も生きられないと判断したからです。昨日、私は神父に、担架に乗せてダットドーまで連れて行ってもらえるよう頼み、最後に私の故郷を訪れました。私が幼い頃にいた場所を見ると、二筋の涙がとめどなく溢れました。

その時、私は直ちに、子供の頃、父と私が苦難から逃げ回っていたことをすっかり思い出し、担架から降りて、かつての家の前の井戸べりに座り、顔を塞いで泣きました。しばらくして、私は起き上がって担架に乗り、バーリアまで連れて帰らせてもらいました。

家に着くと、神父は私に一通の手紙を渡し、それを最後まで読むよう言いつけました。

手紙を開けて見ると、手紙の文字は、署名のない女性の文字でした。その手紙にはこう書かれていました。あなたのためにここに書き写しておきます。

この手紙は、あなたに対して二つの重大な罪を犯した者からの手紙です。その二つの罪のせいで、あなたは一〇年間苦しむことになったのです。申し訳ございません！ 今日明日にもあなたは主の元へと歸られる。だから、私はあなたが耐えなければならなかった被害のことをあなたに打ち明けます。どうか主を鑑として、慈悲の心で、誠実な心を持っていたのに悔やみ自分の罪を償う者のために、その罪をお許しください。

私は愚かで大変性悪な罪深き女です。若い頃、二一歳まで、私は肉体の世界の色欲に溺れるという罪の道を進みました。その頃、私は役人の男性と一緒にバーリアの駐屯地にて三ヶ月が経っていました。一八七一年になって、あなたが通訳でバーリアにやって来たのを知った時、私はまったく不思議なことにあなたを好きになってしまいました。

最初は人を雇ってどうにかあなたを私との罪の道に連れ込もうとしたのですが、あなたが私を軽蔑し嫌っていることが分かり、私は憎しみあうよう策を考えるようになりました。私はあなたを傷つける策を二ヶ月以上考えました。ちょうど運良くリエウ氏がこちらにやって来て馬を買うということでしたので、その機会に私はリエウ氏の字に似せた手紙を二通書き、人に持って行かせて、その二通の手紙を、あなたの伴侶の服に隠させ、それから別のもう一つの手紙をあなたに送って、二人の仁徳者の悪事を訴えたのです。

今あなたにははっきり分かるでしょう。あなたの伴侶とリエウ氏は、無実だというのに、私のせいで死んでしまったのです。だから私はあなたが私の罪を許してくれるようお願いするのです。もし許してくれば、主もまたあなたの罪を許してくれるでしょう。

翌年、一八八五年のちょうど閉校の日に、私はもう一度バーリアに行き、親戚とバーリア区の神父を訪ねた。

その日、私は地区の神父と一緒に、聖地に向かい、殉教者達の教会を訪問した。そこは私の祖父母が眠る場所だ

あったからだ。教会から出た時、私は十字架のわきの墓を見た。そこには、題辞があったが、雨のせいで霞み、残っているのは、一八八四年一月二七日という文字だけだった。私は神父に尋ねた。「あの墓は誰の墓ですか。」神父が答えた。「あの墓は、重い罪を犯した者の墓です。でも、臨終間近になって、すっかり罪を懺悔したから、今はきつと天国にいますことでしょうか。」私は神父に尋ねた。「フィエン氏のお墓ではないですか。」神父は頷いた。私は墓の前にひざまづいて、こう読んだ。

「私達は信じています、主のおかげで、ラザロ・フィエンの魂が安らぎの場所に昇り

無上の歓喜に輝かく天主の顔をいつまでも見ていることを」。

(完)

〔解説〕

本短編小説は、一八八七年にベトナム南部のサイゴンで出版された作品である。ベトナム北部では一九二五年に出版されたホアン・ゴック・ファック Hoàng Ngọc Phách 作『トータム』*Tô Tâm*が近代小説の最初とされてきたが、本作品はそれよりも早い段階で出版された作品であり、一九七〇年代にグエン・ヴァン・チュン Nguyễn Văn Trung によって「再発見」され、ベトナムで最初の近代小説として一九九〇年代以降に「再評価」されるようになった作品である。

ライ・グエン・アンの『ベトナム文学辞典 起源から一九世紀末まで』によれば、作者のグエン・チョン・クアン Nguyễn Trọng Quản は、南部バーリア出身で、一八六五年に生まれ、一九一一年に亡くなっている。南部の知識人チュオン・ヴィン・キー Trương Vĩnh Ký の教え子であり、また娘婿であった。アルジェリアのリセに留学、卒業後に帰国し教職に就き、その傍ら、本作品を執筆している。ライ・グエン・アンは本作品の近代性について、以下のよう

『ラザロ・フィエンの物語』の話は、作者によって自ら「提示」（序文より）したもの、つまり、直接的な生活経験に依拠し、日常に依拠した（「私達のすぐ目の前に常にある、この世の話の一つ」序文より）作者個人の芸術虚構作品である。作品は、個人的生活の話としての筋書きを持ち、キリスト教色を帯びた道德懺悔の主題があるが、ベトナム人の伝統的道理に近い側面を多少なりとも描き得ている。心理描写の芸術性はまだ粗雑なレベルではある。しかし、作品の描写方法は、明確で具体的な歴史的色彩を帯びている。作品の叙述のための素材は、世の中の日常である。語り方（話を語っている人物が責任を負い、目で見、耳で聞いたものをだけを語るという原則に従って実現されている）は、西洋の実証的思考からの注目すべき影響を示している。作品の語る言葉は、その芸術的原則が日常の話し言葉との高度な対応があるところの新しい散文様式である。同時に、文の構造は、西欧諸語の文法に近いところが少なからずあり、駢偶の文の痕跡がほとんどない。

この作品をもつて、ベトナム人の文学において、二〇世紀に形成されることとなる新しい様式のベトナム語の

散文を予告する性質を帯びた、完全に新しい要素が現れるのである。

今一度、訳者なりにベトナム近代小説としての本作品の特徴をまとめるならば、形式面としては、クオックグー表記であること、ベトナム語の口語が用いられた散文であること、が挙げられる。内容面での特徴としては、当時のベトナム人の日常生活に即した虚構であり、登場人物が経験したことが一九世紀半ば以降の史実に即しながら実証的に語られていること、語り手が全知全能者ではなく日常的な人間であり、その語り手の一人称⁵が主人公であるラザロ・フィエンの苦悩（主人公の名前のフィエンは「煩」の意。つまり思い煩うの意味が込められている）の告白を聞いて、それを物語っていること、が挙げられる。なお、一九三四年には、作者の子息グエン・チョン・ダック Nguyễn Trọng Đắc が、*L' Histoire de Lazaro Phien*（ラザロ・フィエンの物語）としてフランス語訳をサイゴンで出版している。（訳者）

（参考資料）

Lại Nguyên Ân, *Từ Điển Văn Học Việt Nam từ nguồn gốc đến hết thế kỷ XIX*, 5 ed., nxb Đại Học Quốc Gia Hà Nội, 2005.

Truyện “Thầy Lazaro Phien” – Dấu mốc khởi đầu của văn xuôi tự sự hư cấu tiếng Việt thời hiện đại, <https://cvdvn.net/2017/10/15/truyen-thay-lazaro-phen-dau-moc-khoi-dau-cua-van-xuoi-tu-su-hu-cau-tieng-viet-thoi-hien-dai/>

テキスト：

P.J.-B. Nguyễn Trọng Quản,
Truyện Thầy Lazaro Phien,
J.Linage Libraire-Éditeur Rue Catinat,
Sài Gòn, 1887,
<https://cvdvn.files.wordpress.com/2017/10/thay-lazaro-phen.pdf>